どっかい

总主编 张正军
副总主编 朴东兰

新日本语能力测试

新启航·挑战系列

高分宝典N1·读解

张丽花 丁玉龙 编著

上海交通大学出版社
SHANGHAI JIAO TONG UNIVERSITY PRESS

新启航·挑战系列
总主编　张正军
副总主编　朴东兰

新日本语能力测试高分宝典

N1 读解

张丽花　丁玉龙　编著

上海交通大學出版社

内 容 提 要

本书根据读者的阅读心理，在内容的选择上注重信息的准确性与趣味性，在题目的选择上注重客观性，注重文章的文脉及内容结构上的关联。问题集针对 N1 读解，由“技巧解说篇”、“真题分析篇”、“模拟试题篇”和“模拟试题分析篇”四部分构成。各部分尽量采用最简单的图表和符号进行分析、说明，力求简洁明了。“文章解说”紧扣“设问”内容，答案选择一目了然。

图书在版编目(CIP)数据

新日本语能力测试高分宝典. N1. 读解/张丽花，丁玉龙编著. —上海：上海交通大学出版社，2011
（新启航·挑战系列）
ISBN 978-7-313-07672-4

Ⅰ.①新… Ⅱ.①张…②丁… Ⅲ.①日语—阅读教学—水平考试—习题集 Ⅳ.①H369.6

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2011)第 162193 号

新日本语能力测试高分宝典

N1 读解

张丽花 丁玉龙 编著

上海交通大学 出版社出版发行
（上海市番禺路 951 号 邮政编码 200030）
电话：64071208 出版人：韩建民
常熟市文化印刷有限公司印刷 全国新华书店经销
开本：787mm×960mm 1/16 印张：14 字数：241 千字
2011 年 8 月第 1 版 2011 年 8 月第 1 次印刷
印数:1 ~ 5030
ISBN 978-7-313-07672-4/H 定价：28.00 元

版权所有 侵权必究

告读者：如发现本书有质量问题请与印刷厂质量科联系
联系电话：0512-52219025

编写说明

一般而言，我们是为了获得信息、满足对知识的好奇心和乐趣而进行阅读的。所以，为了解答问题而进行的阅读可以说是一种特殊的阅读方式。同样，为提出阅读试题所进行的阅读也是一种特殊的阅读行为。出题者设置问题时，必须遵循的基本原则就是问题的客观性，也就是答案必须是唯一的。那么何以确保问题的客观性或者答案的唯一性呢？那就是出题时准确把握文章的文脉（文章的构成）以及段落与段落之间、句与句之间、文章前后的“关系”。那就意味着我们解题同样要在把握上述关系的基础上进行。阅读就是对文章脉络和文章中各种逻辑关系的理解。

为了能快速有效地掌握答题方法，编者将上述关系整理为：三式两论四关系。三式即文章构成的三种模式：头括式、尾括式和两括式。两论是指文章进行推论的方法即所谓三段论（序論・本論・結び）和四段论（序論・本論・反論・結び＝起承転結）。四关系是对文章中各种客观逻辑关系的一个总结，分别是指：同一（比喻）关系、对立关系、因果关系和具体——抽象关系。

本书试图运用上述概念，通过实例分析，提供一种快速有效的阅读方法和解题技巧，提高阅读能力，提高解题的准确性。

本书由“技巧解说篇”、“真题分析篇”、“模拟试题篇”和“模拟试题分析篇”四部分构成。各部分尽量采用最简单的图表和符号进行分析、说明，力求简洁明了。“文章解说”紧扣“设问”内容，答案选择一目了然。

本书使用的符号基本约定如下：

＝……同一关系或比喻关系

⇔⇕……对比关系(据图表的位置关系选择箭头符号)

⇌……具体——抽象关系

⇒ ⇓ ⇑ ……因果关系(据图表的位置关系选择箭头符号)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目　录

第一部分　技巧解说篇 …… 1
一、把握文脉 …… 1
二、两种推论模式 …… 1
三、四种关系 …… 1
四、实战运用 …… 2

第二部分　真题分析篇 …… 44
一、2009－1　真题分析 …… 44
二、2009－2　真题分析 …… 61
三、2010－1　真题分析 …… 78
四、2010－2　真题分析 …… 96

第三部分　模拟试题篇 …… 117
模拟试题一 …… 117
模拟试题二 …… 129
模拟试题三 …… 142
模拟试题四 …… 155
模拟试题五 …… 168
模拟试题六 …… 182

第四部分　模拟试题分析篇 …… 198
模拟试题一解析 …… 198
模拟试题二解析 …… 201
模拟试题三解析 …… 205
模拟试题四解析 …… 209
模拟试题五解析 …… 213
模拟试题六解析 …… 216

第一部分　技巧解说篇

一、把握文脉

按照本论和结论在文章中的位置，可将文章构成的基本模式分为：

(1) 头括式。即文章开头便阐明主题或结论，然后逐次对其进行说明或论证。

(2) 尾括式。即文章在开头对主题进行说明或论证，最后陈述结论。

(3) 两括式。即为了强调主体或结论，文章把主体或结论放在开头和结尾部分，中间部分进行说明或论证。

二、两种推论模式

文章进行推论的模式一般有两种：

(1) 三段论。序论(提出问题)—本论(说明和论证)—结论(结尾)

(2) 四段论(起承转结)

① 起——陈述主题或写作动机等。

② 承——承上启下，对上部分内容进行细致的说明或论述。

③ 转——从不同的观点进行论证或提出相反的意见、情况，并对此进行反论，从而证明主题的正确合理性。

④ 结——陈述结论。

三、四种关系

句子、段落之间的逻辑关系可总结为以下四类：①同一(比喻)关系；②对比关系；③具体—抽象关系；④因果关系。

阅读文章时，首先要清楚文章的构成属于哪种模式，切实把握文章展开的思路，在文章开头或结尾处找到文章的主题、主张或论点。这对准确把握文章内容至关重要。无论是怎样的设问，我们都必须了解全文的主线和文章构成。知道设问在文章中的哪一部分，起怎样的作用。答题时，我们可以运用“四种关系”具体分析解答。下面以“四种关系”的分析技巧为主轴，对具体文章进行分析，以进一步明确各技巧在解题时的具体运用。

四、实战运用

例文 1　次の文章を読んで、後の問いに対する答えとして最もよいものを、1・2・3・4 から一つ選びなさい。〈同一关系〉

母の記憶の手がかりとなるものとしては、私は一冊の古びたアルバムを持っているだけである。そのほかの遺品や写真などは、みんな戦災で焼けた。なぜ父が荷物の疎開をためらっていたのかは、いまもって私にはよくわからない。大久保百人町の家の納戸には、母の遺品類だけではなく、祖父や祖母の品物も入っていたので、父がそれらに愛着を感じないはずはなかったからである。

あるいは、戦争中だれでもがそう考えたように、よその家が焼けても自分の家だけは助かると考えていたのかも知れない。そして ⓐ納戸の荷物を鎌倉の疎開先に移した場合に、母にまつわる品物を義母や弟妹たちの目にさらすことになるのを憚ったのかも知れない。私は病弱だったので、戦争がはじまる少し前に鎌倉に転地させられていたが、この家は義理の祖父、つまり義母の父の隠居所のすぐ近くにあった。そういうことも、あるいは納戸に手をつけるのを父にためらわせる一因になっていたかも知れない。

いずれにせよ、その頃の父のやり方は、常識的に考えると不可解なことが多かった。「疎開が面倒くさかった」という父の説明がほとんど何も語っていないことはいうまでもない。父はおそらく一面では納戸が焼けてしまうことを願いながら、他の半面ではそれが絶対に焼けずにいてくれることを願っていたにちがいない。ついに五月二十五日の空襲で、大久保の家が直撃弾を受けて全焼したとき、父はその焼跡を見に行ってがっくりと肩を落とし、明らかに荒廃を全身にただよわせて鎌倉にもどって来た。父は多分再婚によってできあがった人工的な秩序と、それにもかかわらず実在した ⓑ心理的な現実との

落差を、どう調整したらいいかに戸惑いつづけていたのである。こういう彼にとって、おそらく戦争そのものよりも家庭の内部の問題のほうが、はるかに重くて危機感に満ちた問題だったことは想像に難くない。

しかし私は、こうして母の痕跡が自分の周囲から喪われてしまったことについて、永いあいだひそかに父を恨んでいた。それはいわば自分の存在の核につながる記憶を抹殺されることだからである。自分の大久保の家に対する異常な執着を思うたびに、私はあの家が自分にとって単なる建物以上のものだったことを思い知らされる。単なる建物としてみれば、それは震災以前の東京山の手の住宅様式の平凡な一例にすぎない。犬山の明治村で駒込千駄木町五七番地から移された鴎外・漱石の旧宅をはじめて見たとき、私は細部や規模は別として、この家が大久保の家と同じ建築思想にもとづいて建てられているのをなつかしく思ったことがある。しかし、あの大久保の家は、おそらく私にとっては母そのものの象徴だったのである。そして母の死後、その道具の大部分が実家にひきとられていったあとでも、なお母の記憶がただよっていた納戸は、多分私にとって母の胎内に等しい役割を果していたにちがいない。

（江藤淳一『家族再会』）

問1　傍線部ⓐの部分の父の心づかいによって維持されている状況を筆者はどう言い換えているか。

1 日常生活　　2 人工的な秩序　3 母の記憶　　4 心理的現実

問2　傍線部ⓑ心理的な現実の説明として正しいものはどれか。

1 再婚者としての周囲に対する遠慮
2 戦争による肉親の死に対する恐怖
3 前の妻に対する消えやらぬ愛情
4 母の死を悲しませないための子に対する配慮

問3　筆者の母に対する感情はどのようなものか。

1 子を限りない安息と満足感に浸らせてくれる、母親の優しさに対する慕情
2 「家」に密着して生きなければならなかった母親の、女としての哀れさに対する同情
3 愛する夫を残し若くして死んでいった母親の、妻としての無念の思いに対する哀憐

4 すでに漠然とした記憶しか残っていないほど、遠い存在になってしまった母親に対する淡い興味

【文章解析】

(1) 本文是以“同一关系”为基轴展开叙述的典型的“起承转结”式文章。三个设问“どう言い換えているか”、“～の説明として”、“どのようなものか”也是典型的基于同一关系上的问题。首先可以将文章主脉络整理如下:①起——提出问题,“なぜ父が荷物の疎開をためらっていたのかは、いまもって私にはよくわからない”。②承——对导致父亲矛盾心理的原因进行推测和剖析,表示一定的理解。③转——但是,对“我”而言,母亲遗物的烧毁意味着“自分の存在の核につながる記憶を抹殺される”,所以对父亲心怀恨意。④结——“大久保の家”于我而言就是“母親の象徴”,“納戸”起到了与“母の胎内”相同的作用。

(2) 关于“父”的矛盾心理,可以作如下分析:

父は納戸が焼けてしまうことを願った。 ⇔〈对比关系・父亲的分裂心理〉 父は納戸が絶対に焼けずにいてくれることを願った。

=〈同一关系〉

再婚によって出来上がった人工的な秩序 ⇔〈对比关系・父亲的心理落差〉 心理的な現実

⇒〈因果关系〉

父が荷物の疎開をためらっていた。

【问题 1 解析】

“父亲”担心继母和弟妹们看到与母亲有关的物品,收藏着母亲物品的房子位于继祖父家附近,犹豫是否要转移那些物品——要维护现有的家庭秩序。而现有的家庭秩序 = 由于再婚而建立起来的“人工的な秩序”。所以正确答案是选项 2。

【问题 2 解析】

从上图的“同一关系”中可以知道“心理的現実”就是父亲一方面希望维持“再婚によって出来上がった人工的な秩序”,另一方面又希望“納戸が絶対に焼

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

けずにいてくれる”。因为“納戸”中收藏了对母亲的记忆。所以正确答案是选项3。

【问题3解析】

只要关注文章结尾部分“母の記憶がただよっていた納戸は、多分私にとって母の胎内に等しい役割を果していた”这句话，就可知道作者对母亲的感情是如胎儿在母亲子宫内的感觉。所以正确答案是选项1。

例文2　次の文章を読んで、後の問いに対する答えとして最もよいものを、1・2・3・4から一つ選びなさい。〈因果关系〉

林の入口で道は二つに分れていた。正面は丘を越えて真直ぐに病院へ行く道、左は林の中に丘の鼻を廻って、同じ谷間へ入る道である。丘越えの道か無論近いが、私はすでに昨日から二度往復してその道に飽きていた。目的のない者の気まぐれから、私は未知の林中の道を取る気になった。

林の中は暗く道は細かった。樫やくぬぎに似た大木の聳える間を、名も知れぬ低い雑木が隙間なく埋め、蔦(つた)や蔓を張りめぐらしていた。四季の別なく落ちつづける、熱帯の落葉が道に朽ち、柔らかい感触を靴裏に伝えた。静寂の中に、新しい落葉が、武蔵野の道のようにカサコソと足もとで鳴った。私はうな垂れて歩いて行った。

奇怪な観念がすぎた。ⓐ<u>この道は私が生れて初めて通る道であるにもかかわらず、私は二度とこの道を通らないであろう、</u>という観念である。私は立ち止り、見廻した。

なんの変哲もなかった。そこには私がその名称を知らないというだけで、いろいろな点で故国の木に似た闊葉樹が(直立した幹と、開いた枝と、垂れた葉と)静まり返っているだけであった。それは私がここを通るずっと前から、私が来るか来ないにかかわらず、こうして立っていたであろうし、いつまでもこのままでいるであろう。

これほど当然なことはなかった。そして近く死ぬ私が、この比島の人知れぬ林中を再び通らないのも当然であった。奇怪なのは、その確実な予定と、ここを初めて通るという事実が、一種の矛盾する連関として、私に意識されたことである。

もっとも私は内地を出て以来、こういう不条理な観念や感覚に馴れていた。

たとえば輸送船が六月の南海を進んだ時、ぼんやり眺めていた私は、突然自分が夢の中のように、整然たる風景の中にいるのに気がついた。

紺一色の海が広がり、水平線がその水のボリュームを押し上げるように、正しい円を画いて取り巻いている。海面からあまり離れていない一定の高さに、底部が確然たる一線を成したお供え餅のような雲が、おそらくは相互に一定の距離を保って浮かんでいる。そしてそれが船の一律の速度で進むにつれ、任意の視点を中心に、扇を廻すように移って行く。舷側をすぎて行く規則正しい波の音と、単調なディーゼルエンジンの音に伴奏されて、ⓑこの規則正しい風景は、その時私にはなはだ奇怪に思われた。

偶然安定した気圧の下に、太陽が平均した熱を海面に注ぎ、絶えず一定量の水蒸気を蒸発させる以上、一定の位置に、同形の雲を生じるのになんの不思議はなかった。そして機械によって一定した速度で進む船から眺める以上、風景が一様の転移を見せるのも当然であった。私は即座にこう反省したにもかかわらず、私の昂奮はなかなか去らなかった。そこには一種快い苦痛のニュアンスがあったのである。

もしこの時私が一遊覧客であったならば、帰国後自国の陸に繋がれた哀れな友人に、大洋の奇観を語る場面を空想したろう。私の昂奮と苦痛は多分、敗戦と死の予感に冒されていた私が、その奇怪な経験を人に伝えることを、予想できないことに基づいていたろう。

比島の林中の小道を再び通らないのが奇怪と感じられたのも、やはりこの時私が死を予感していたためであろう。我々はどんな辺鄙な日本の地方を行く時も、決してこういう観念には襲われない。好む時にまた来る可能性が、意識下に仮定されているためであろうか。してみれば我々のいわゆる生命感とは、今行うところを無限に繰り返し得る予感にあるのではなかろうか。

（大岡昇平『野火』）

問1 ⓐこの道は私が生れて初めて通る道であるにもかかわらず、私は二度とこの道を通らないであろう と思ったのはなぜか。

1 初めて通る道だが、つまらないからだ。
2 私が死を予感していたからだ。
3 二度とこの道を通らないという確実な予定があるからだ。
4 奇怪な観念がすぎたからだ。

問2　ⓑこの規則正しい風景は、その時私にはなはだ奇怪に思われたのはなぜか。

1 興奮と苦痛の感情に苛まれているから。

2 不条理な観念や感覚に馴れていたから。

3 その規則正しい風景こそ、大洋の奇観であるから。

4 敗戦と死の予感に冒され、人に伝えることを予想できないでいたから。

【文章解析】

这是一篇以“因果关系”为主线展开叙述的尾括式文章。文章构成可整理如下：

第一部分(第1～5段落)：提出问题。

奇怪な観念が過ぎた。 = この道は私が生れて初めて通る道であるにもかかわらず、私は二度とこの道を通らないであろうという観念。

=

比島の人知れぬ林中を再び通らないという確実な予定と、ここを初めて通るという事実が、一種の矛盾する連関として、私に意識されたのはなぜか	(提出问题)

第二部分(第6～9段落)：对提出的问题进行例证。6月乘运输船经过南海时也经历了同样的“不条理な観念や感覚”。

海上に見える規則正しい風景がその時、私にはなはだ奇怪に思われた	(结果)

⇑

敗戦と死の予感に冒され、人に伝えることを予想できないでいた	(原因)

第三部分(第10段落)：以第二部分为根据得出结论

比島の人知れぬ林中を再び通らないという確実な予定と、ここを初めて通るという事実が、一種の矛盾する連関として、私に意識されたのはなぜか	(问题)

⇑

死の予感による感覚 ① 初めて通る林の道なのに、二度と通らないという予感 ② 規則正しい海の風景が奇怪に思われた。 ③ 珍しい風景に出会っても、人に伝えることを予想できない。 ⇔(对立关系) 生命感 ① 初めて通る林の道を繰り返し通るだろう ② 珍しい風景に出会ったら、人に伝えうるだろう	(理由)

【问题解析】

两个设问都是建立在“因果关系”上的,根据图表分析很容易可以找到答案。问题 1 的正确答案是选项 2,问题 2 的正确答案是选项 4。

例文 3　次の文章を読んで、後の問いに対する答えとして最もよいものを、1・2・3・4 から一つ選びなさい。〈具体——抽象关系〉

カニもどき、ホタテもどき、カズノコもどき(注 1)、といったコピー食品が、それぞれスケトウダラ(注 2)のすり身やシシャモの玉子のくずを用いて、整形機から生まれることはよく知られている。まさにイミテーション(のようなもの)文化の到来である。問題はマーガリン(注 3)がバターを凌駕したようにコピー食品がオリジナルにとってかわり、今や偽物は罪悪感の対象どころか最も時代を先取りしたものという評価を与えられ、「ニセの美学」が確立されつつある点だと言えるであろう。人々は偽物によって操作されに価値観の転倒に気づかず、たとえば、「ヴァイオリン教室に通う子供が高価な偽のガダニー二(注 4)を抱えたまま道で転んだら、子供より先に楽器を拾い上げて、心配そうになぜまわした」母親の如き人間が登場するのである。

そんな状況下で、私たちはいったいどうしたら「真贋を見分けられるのか」という気持になるのも無理はない。偽のディオールと本物のディオールの違いはどこか。本物のエルメスを上手に見分けるコツは何か。しかし専門家と称する人種を除いてはもはや本物と偽物の区別もつかない。「何かがおかしい、狂っている」と感じ「世の中で確かなものは何なのか」とむなしく追い求めながら、人々は正解が得られないままにシラけきっていくと言う。だが、ここで、私は発想を180度転換させねばならないのではなかろうか。つまり、「現代文化には偽物が横行していて、その真贋の区別がつかなくなっている」のではなく、「古今東西、人間の文化という錯誤の体系のなかにおいては、[　A　]」のではあるまいか。

しかし、典型的な真贋(しんがん)の例として贋金と本当の貨幣がある、と反論する人があるかも知れぬ。なるほど、それほどに人の心を虜(とりこ)にし、そのためには往々にして命を捨て、命を奪う金こそ間違いなく本物であるように思われかねない。ところで貨幣は、人間という動物にとって如何なる真実の価値を有しているのであろうか。偽札はもちろんのこと、ⓐ国家お墨つきの真券がどうして私たち人間にとって本物と言えようか。その国家そのものが共同幻想としての作り物かもしれないというのに、これを如何なる絶対的価値基準に立てることができよう。第一次大戦後のドイツや第二次大戦後の日本のインフレにおける貨幣価値の暴落を言っているのではない。早い話、それが物品貨幣であれ金属貨幣であれ、額面価値と素材価値が一致しない票券貨幣であれ、そもそも貨幣なるものは貨幣経済という制度確立以前の人間にとって、あるいはまた現代でも制度の外にいるブッシュマン(注5)やピグミー(注6)にとって、如何なる自然的、絶対的価値を持っているかを考えるだけで十分であろう。それにもかかわらず、「人間万事金の世の中」「地獄の沙汰も金次第」「金は力」と言った諺に示される昔ながらの金権構造は、それを支える私たちの価値観が「貨幣のフェティシズム(注7)」に捉われ、ⓑ人為の制度を容認し、それを強化する限りにおいて、絶対的実現となっているだけの話である。

また、偽のブランド商品に対して考えられる本物のブランド"とはいったい何だろうか、あの「かっこよさ」、「流行の先端を行く気分」、「人の羨望の的となること」と言ったものは、人間という生物にとって果たして絶対的な本物としての価値であろうか。J・ボードリヤールやロラン・バルトを援用するまで

もなく、ベンツはそれがもつ実用性以上に社会的ステイタス(注8)のシンボルとして機能し、形態専用のレインコートはアクセサリーと化して、雨を防ぐ働きも持たぬ。さらにつきつめて言うならば、道具一般が有するかに見える実用性つまり使用価値すらが、文化の生み出した非自然的な関係としての価値に過ぎない。この状況もまた、それを支える私たちの価値観が、〈商品のフェティシズム〉に捉われている限りにおいて、絶対的実現、つまりは本物となっているだけの話である。

まことに他愛のない話だが、象徴的な意味を持つものとしてもう一つの例を挙げてみよう。全国的に人気のある時代劇シリーズの一つに、水戸黄門物というのがある。あの中には、文字通り偽の黄門様などというのが時々登場して楽しませるが、偽の黄門がふりかざす偽の葵の紋の印籠に対して、本物の黄門がふりかざす印籠は、いったいどういう意味で本物なのであろうか。それが本物の価値を持ち、権力の象徴として作動するのは、徳川時代の士農工商という階級、支配—被支配なる歴史的人為によって樹立された価値体系を前提とする時のみであり、それを支えている共犯としての大衆の、〈権力のフェティシズム〉によってのみ絶対的実現となっていることは言うまでもなかろう。

私たちは本物志向という誘惑からなかなか逃れられない。その結果、いわゆる偽物のブランド商品に騙される以上に、本物と信じているブランド価値に踊らされ、贋金に騙される以上に、本物と信じている貨幣に操作されて金権政治に荷担してしまう。テレビがでっち上げる擬似イベントが偽物である以上に、テレビの画面そのものが、実は光の点の点滅と連続に過ぎず、スクリーンの上に現れる映像は、匂いも暖かみもない人間の偽者であることに気づかない。そうして私たちは画面を見ながら、笑い、且つ泣く奇怪な動物である。動物と言えば、その欠くべからざる二大本能にしても、人間においてはまことに不思議なありようではまいか。私たちはもはや個体維持のためにのみ食べるのではなく、種の保存のためにのみ性関係を結ぶのではない。ありとあらゆる社会生活の局面において、人為的記号が人間と環境世界との間に幕を介入させ、人々はその皮膜を通して以外、生の現実と交流できなくなっているのである。

(丸山圭三郎『文化のフェティシズム』)

(注1) もどき:何かに似ているように作ること。また、そのもの。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com